

補文標識「の」「こと」の共時的観点からみた使い分けについて

麗澤大学大学院 博士後期課程1年

秋本瞳

【概要】

本稿は、形式名詞、補文標識とも呼ばれる、文を名詞化する働きのある「の」「こと」について、なぜその二つが使い分けられ、その両方が許容される文があるのか、従来の先行研究とは異なった観点から捉えなおし、考察することを目的としている。この問題については、既に多くの先行研究において考えられてきたが、本稿ではまずこの問題に関して、電子化されたテキストから用例を抽出し、補文標識「の」「こと」がどのくらい、またはどのように用いられているのかを明らかにすることを試みた。またその際に、補文標識「の」「こと」のどちらかが選択されるのは限られた場合であり、命題部分にいわゆる「gap」があると認められる場合や語彙的に決まっている表現などを除くと、基本的に「の」「こと」のどちらも用いることができるのではないかと、といった仮説をたて、この仮説が今回集めた用例にあてはまるかどうかを検討した。このように本稿においては、これまで考えられてきた補文標識「の」「こと」それぞれの本質が共時的にみた場合、「の」「こと」の使い分けに関与しないとする方向で考察を進めた。

0. はじめに

まず、本稿では、工藤（1985）においても触れられている「文（句）相当のものをそのまま名詞化するにあたって」用いられる「の」「こと」について考察するが、このような「の」「こと」をここでは「補文標識」と呼び、「補文標識」によって名詞化される文を「補文」、補文が埋め込まれた文を「主文」と呼ぶ。例をあげると（1）では、「この家の娘が猫好きで、かならず野良猫に餌をやる」が補文、「その猫は、この家の娘が猫好きで、かならず野良猫に餌をやる の/こと を知っている」が主文となる。次のような「の」「こと」は、それぞれ交替可能な場合とそうでない場合とがある。

（1）その猫は、この家の娘が猫好きで、かならず野良猫に餌をやる の/こと を知っている。

（2）私は猫に顔を引っかかれ、母に泣かれた *の/こと がある。

（3）昨日、公園で猫が犬のようにつながれて散歩している の/*こと を見た。

本稿では、上にあげた例のように、「の」「こと」が文を埋め込むはたらきを担っていると考えられる場合を対象として、それらがどのような条件から使い分けられているのか、または場合によっては同じように用いられているのかを考察する。尚、本稿における考察の対象となる「の」「こと」は、次の二つの条件に適っていることが前提となる。

- ① 文の中に埋め込まれたと考えられる補文の存在が認められる

② ①の補文が「の」「こと」によって名詞化されていると考えられる

従って、本稿で扱う「の」「こと」について、

(4) 前人未到の七連覇を達成したのは、今テレビに出ているこの力士だ。

(5) このチームが優勝できなかった の*こと は、優勝したチームの作戦の罨にひっかかったからだ。

(6) 今回優勝した の*こと は、前回優勝できなかった。

以上の(4) - (6)のような例を(1) - (3)と区別する。いずれも

(4) ^今テレビに出ているこの力士が前人未到の七連覇を達成した。

(5) ^優勝したチームの作戦の罨にひっかかったから、このチームは優勝できなかった。

(6) ^今回優勝したチームは前回優勝できなかった。

のような文をそれぞれ考えることができる。いずれも、意味的に存在すると考えられるが音声的に実現されず、また既出の要素を指示するとは考えられない要素の存在が認められ、その意味で(4) - (6)のそれぞれの補文の中に **gap** があると考えられる。本稿においては、(4) (5)のような用例について「焦点の **gap**」、(6)のような例については「具体的なものを指す **gap**」のある文と呼ぶ¹。さらに、(4) (5)のような例に見られる **gap** は「焦点の **gap**」と呼び、この「焦点の **gap**」を含む文を名詞化しているようにみえる「の」は、焦点化構文の一部と考えることにする。(6)のような例についても、「の」によって名詞化されているようにみえる文(「今回優勝したチーム」)に **gap** があり、それが名詞と同一指示であるような構造において、その名詞が普通名詞ではなく、「の」で表されていると考えられる。

また、「こと」についても、上述した条件に合致しないと考えられる場合がある。

(7) あの上司の言うことは気にしないほうがいい。いちいち真に受けていたら大変なことになる。

の「あの上司の言うこと」の「こと」のように、「こと」が「内容」などに相当すると考えられる場合である。この場合、その「内容」にあたる部分が補文内に存在する((7) ^のように)と考えられるが、音声的に実現されず、上であげた①の条件をみたしていないとも考えられるため、このような用例を「焦点の **gap**」「具体的なものを指す **gap**」と共に今回の考察の対象から区別する。

(7) ^上司が<内容(例えば「他の社員の悪口」など)>を言う

本稿では、(7)のような用例について以下、「内容を指すコト」が用いられている用例として扱う²。また、「大変なことになる」は、固定された表現であると考えられるが、考

¹ この用語は便宜上用いられるのであって、特定の言語理論によるものではない。

² 具体的なものを指す「の」と同じものを指すと考えられる **gap** をもつ補文や、「内容を指す「こと」と同じものを指すように考えられる **gap** をもつ補文は、英語などでは関係節に相当すると考えられる。

察の対象の条件①の内容に反すると考えられるため、このような「こと」も本稿ではその考察の対象としない。

1. 補文標識「の」「こと」の使い分けに関する先行研究

補文標識「の」「こと」の使い分けに関する先行研究は、以下の図のように1. 1 補文や主文の意味や関係に着目するのか、1. 2 「の」「こと」の統語的な特徴からそれらの違いについて考察するのか、といった点でまず分類され、1. 1はさらに、補文や主文の意味や関係から「の」「こと」の使い分けについてとらえる立場をとる場合（1. 1. 1）、補文標識「の」「こと」のどちらかが選択される場合と両方用いられる場合とで、それぞれ「の」「こと」が二種類あると考えるか否か（1. 1. 2）で分かれる。

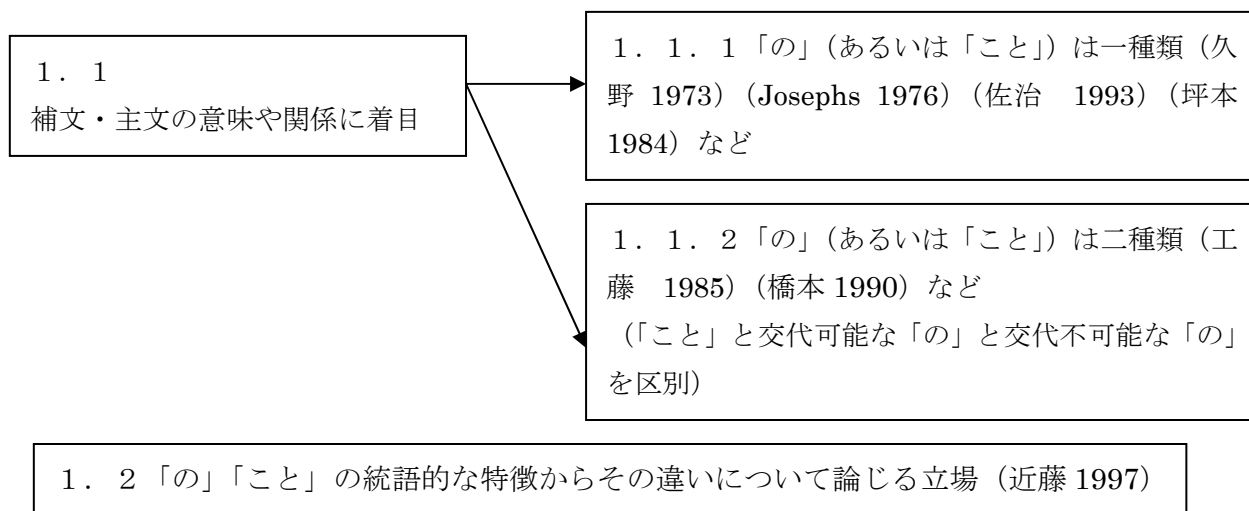


表1 主な先行研究の分類

1. 1. 1 補文・主文の意味や関係に着目し、「の」(あるいは「こと」は一種類)

まず、1. 1. 1の「補文・主文の意味や関係に着目し、「の」(あるいは「こと」は一種類)であるとみなしている捉え方について、その中でもさらに

- ・「の」「こと」そのものの意味があり、それが補文の意味的特徴とあいまってその文に「の」「こと」の選択に影響を及ぼしている、と考える立場（久野(1973)や Josephs(1976)など）
- ・ 補文と主文の述語の関係から「の」「こと」が区別されると考える立場（佐治(1993)や坪本(1984)など）

とがある。

前者は

「の」・・・具体的な「動作・状態・出来事」(久野 1973)、「直接に知覚された出来事」(Josephs 1976)

「こと」・・・「抽象化された概念」(久野 1973)、「抽象的に知覚された出来事」(Josephs

1976)

のように、「の」あるいは「こと」が用いられるのは補文や主文がそれぞれ異なった意味的解釈がなされると考える捉え方であり、且つ

(8) 花子ハ太郎ガ来ルコトヲ期待シテイタ。

(9) 花子ハ太郎ガ来ルノヲ期待シテイタ。 (久野 1973)

のような「の」も「こと」も用いられうる文においては、そのどちらが用いられるかによって、意味的解釈も異なってくるとする捉え方をする。しかし、その意味的な解釈はときに、

(10) 犯罪が将来起こる {の/こと} を防止しなければなりません。(Josephs1976)

のように、「の」「こと」の違いがみられるのかどうか判断に迷う場合もある。

また、後者には、文に埋め込まれる「の」「こと」について、構文的、あるいは慣用的に用いられる表現を例に上げ、「の」や「こと」の本来の用法について言及しているが、本稿がその目的とする、共時的にみた補文標識「の」「こと」の使い分けに関しては、そのように考えることが妥当であるのか疑問が残る。例えば、坪本(1984)においては、「補文と主文(特に述語)との間の緊密な意味的、構文的関係とが相俟って、二つの文が一体となった一つの事態をつくるところに「ノ」の真価があると言える」と述べ、そのような「一体感」があらわれている例として以下にあげるような例をあげている。

(11) 警察は [ドロボーが花子の財布を盗む] $\left\{ \begin{array}{l} *コト \\ ノ \end{array} \right\}$ を捕まえた。 (坪本 1984)

(11) のような用例は、黒田・中村(1999)においては「主要部内在型」と呼ばれている。本稿では() のような例については、

(12) 警察は花子の財布を盗むドロボーを捕まえた。

といった文を導き出すことができるため、最初にあげた

(1) その猫は、この家の娘が猫好きで、かならず野良猫に餌をやる の/こと を知っている。

のような(12) のような文を導き出すことができない例とは区別する立場をとる。このような例から「ノ」の真価を導き出すことについての妥当性はそれだけでは判断することができないが、坪本(1984)による主張は、(11) のような用例など「の」が専ら選択される例が限られていること、「の」も「こと」も許容され得る例については意味的な解釈が必要であることを示唆していると考えられる。

また、「こと」にも

(13) シャンソンを下町で聴いたことがない。

坪本(1984)で述べられている「一体感」があらわれていると考えられる用例もある。

佐治(1993)においては、「の」の本質を通時的な観点から導き出しているため、本稿の共時的にみた補文標識「の」「こと」の使い分けの条件とはその「の」の本質を切り離して考える必要がある。

1. 1. 2 「の」(あるいは「こと」) は二種類

工藤(1985)や橋本(1990)のように「の」や「こと」が、そのどちらかしか選択されない場合の「の」「こと」と「の」「こと」のどちらも用いられる場合の「の」「こと」とをそれぞれ区別する立場をとるものもある。工藤(1985)では、主文の動詞を「の」だけ用いられる場合、「こと」だけ用いられる場合、両方用いられる場合とで分類し、「の」「こと」の使い分けについて説明を試みている。しかし、その動詞の分類は例外があり、工藤(1985)ではそのことに関し、動詞の意味や性質が、その場合に限って異なった解釈がなされる、または補文の内容が「の」「こと」の選択に影響を及ぼすためであると述べているが、その主張は、久野(1973)や Josephs(1976)の主張につながり、またそれと同様の問題が生じることになると考えられる。

一方、橋本(1990)では、意味的、そして統語的な観点から二つの規則から補文標識「の」「こと」が使い分けられていると述べられている。しかし、またこのような規則も補文の意味的な解釈を必要とする点において、先述した先行研究と同様の問題が残り、また、宮島・仁田(1995)も指摘するように工藤(1985)と同様「の」(あるいは「こと」)が二種類あると考えることに対する妥当性について検証する必要があるように思われる。

1. 2 「の」「こと」の統語的な特徴からその違いについて論じる立場

近藤(1997)では、統語的な特徴から補文標識「の」「こと」の違いがみられるとし、電子化されたテキストを用い³、「ことが」節「のが」節の用例を抽出した。その結果、「ことが」節は、主文の述語が「かなり自由に自動詞・他動詞・使役形」であられるのに対し、「のが」節は、近藤(1997)で抽出した用例からは、主文の述語が「基本的には、非対格自動詞や形容詞・名詞文」であり、「強い制限」があると述べている。近藤(1997)ではその内容をうけ、「の」節が「非対格自動詞(含む形容詞)の主語に用いられ、その意味は、「対象」である」とみなされることから「のが」節「ことが」節が「典型的な能格的分布をしている」との結論を引き出している。しかし、本稿で扱う「の」「こと」の用例と近藤(1997)で用いられる用例とを比較した際に、考察の対象としてそれらが一致しないと判断できるように思われる用例があること、そして、許容度と頻度とを区別せずに以上のような結論を導き出していることから、それらの点をふまえたうえで、近藤(1997)で述べられているような結論が導き出されるのかどうか検証する必要があると思われる。

また、影山(1977)で述べられているように、このような「の」「こと」を「変形文法的」に「意味的」・「統語的」両方の側面から先行研究を位置づける捉え方もある⁴。本稿においては、影山(1977)における「意味的」側面の「資格」(「の」や「こと」を「名詞」として扱うのか、「補文辞」として扱うのか)について扱い、「統語的」側面の「派生方法」(「基底

³近藤(1997)では、1994年一年分の『日本経済新聞』の記事を用い、そのうち「のが」節が25605例、「ことが」節が26832例であったと述べている。

⁴影山(1977)は、「形式名詞」「準体助詞」または「名詞補文辞」とよばれる「の」「こと」が、「名詞」としての資格をもち、「基底規則」によって派生されると考える Nakau(1973)などがとっている立場を支持している。

規則」として扱うのか、「変形規則」として扱うのか) については基本的に扱わないが、そのような観点から考えることによって、本稿で扱った「の」「こと」の問題がどのようにとらえられるのかについて考察することは今後の課題である。

2. 仮説

補文標識「の」「こと」の共時的な使い分けの条件において、先行研究の内容をふまえるとして仮説をたてる際に問題となるのが、共時的にみて補文標識「の」「こと」に文を名詞化するという機能以外のなんらかの性質があるとして、それを本質として扱い、その存在を認めるか否かである。さらに、付け加えると先行研究には、通時的にみた部分、共時的にみた部分を混同していると考えられるようなものもあったが、本稿ではその点も考慮した上で、仮説をたてることにする。以上の点をふまえ、仮説をたてる際の焦点は次の二点に絞られると思われる。

- ・「の」「こと」にそれぞれ文を名詞化する以外の機能を含む本質があるとして、それがその使い分けに影響を与えているとするならば、その本質はどのようなものであるのか、または明示的な形で説明ができるのか
- ・上記のような本質がないとしたら、なぜこのような使い分けが存在しているのか

本稿においては、補文標識「の」「こと」の使い分けはどのような条件からなされているのか、その点を考える際に、本稿では、「の」や「こと」の専らそのどちらかが選択される例にまず着目した。

(14) 太郎は〔ノリが乾く〕ノを待った。 坪本(1984)

(15) 母は私の宿題の工作を仕上げる の/*こと を手伝い、自分の方が夢中になった。

(16) 太郎は今まで見たことも無いようなおもちゃを考え出す *の/こと ができる。

(17) 車のドアに思いっきり指をはさんだ *の/こと がある。

(18) 一人で道に迷って本当に困るまで、私は地図をちゃんと見た *の/こと がなかった。

これらの用例は「(～する) のを待つ」「(～する) のを手伝う」「(～する) ことができる」「(～した) ことがある」「(～した) ことがない」など、<補文 の/こと (助詞) 待つ・手伝う・できる・ある・ない>といった形で用いられているが、「の」や「こと」の本質、があると認める立場にたって、このような用例において「の」や「こと」が専ら選択される理由を説明することは難しい。例えば、久野(1973)で述べられていたような解釈をする場合、「(～する) のを待つ」は「の」の性質上、補文が具体的なものを指すことになるが、

(19) 世界中から争いごとが全く無くなる時代が来る の/*こと を待っています。

のような抽象的なものを指すと考えられる例も挙げられる。逆に「(～する) ことができる」も「こと」の性質上、補文が抽象的なものを指すことになるが、

(20) 太郎は足の指で器用に物をつかむ *の/こと ができる。

具体的なものを指すと考えられる場合でも「の」は選択されない。以上のように補文が抽

象的あるいは具体的な内容を示していても「の」あるいは「こと」のどちらかをとることは変わらない。このように考察を進めると、先行研究について述べた際にも少し触れたが、久野(1973)以外の先行研究で述べられていた意味的な解釈においても、その主張にあてはまらない用例がでてくる。従って、「の」あるいは「こと」の本質は、それ自身が存在するとしても意味的な解釈によらない方法で考えられなければならない可能性がある。しかし、意味的な解釈をせずに、且つ共時的にみた補文標識「の」「こと」の使い分けの条件を考えることは容易ではないと考えられ、「の」「こと」の本質があるとしても、その本質は共時的にみてそれ自身を導き出した例以外のものにもあてはまるように提示されなければならない。そこで、本稿においては、そのような本質があるとする立場をとらずに、後者の、「の」「こと」のそれぞれの本質を考えずに、補文標識「の」「こと」がどのように使い分けられているのかを明らかにする方向で考察をすすめることにした。

さらに、本稿においては、(14) - (18) のような用例において「の」や「こと」が選択される理由をそれらの本質に求めず、これらの表現が限定されており、また固定された表現であるようにも思われることから、語彙的な要因から、「の」あるいは「こと」が選択されると考えた。

以上のことをふまえ、「の」「こと」の使い分けが共時的にみた場合、(文を名詞化する機能以外の)「の」「こと」の本質を考えずに、主に前述した gap のある用例や、語彙的な要因から「の」「こと」が選択されると考えられる例においてみられるものであり、それ以外は基本的に使い分けはなく、頻度の差がみられるだけではないか、という仮説を本稿ではたてることにした。

3. 仮説の検証・結果

3. 1 データについて

今回、補文標識「の」「こと」がどのように用いられているのかを調べるため、そして、仮説を検証するために、二種類の電子化されたテキストデータを用意した。いずれも日本語教育支援システム研究会から配布されている、日本語教育支援システム (CASTEL/J) による CD-ROM 『CASTEL/J CD-ROM V1.3』 (通称『ミレニアム・バージョン』) に収められているデータで、テキストデータとしては 582 ファイル (ファイルサイズとしては 66.7MB) が収められている。

そのうちの一つは、「CASTEL/J BOOKDATA: CASTEL/J CD-ROM2000 書籍データ」で、これは「新書 (講談社)、ブルーバックス (講談社)、白書等」の書籍 (294 ファイル、ファイルサイズとしては 52.5MB) を CD-ROM に収めたものである。今回はその中から吉田寿三郎 (1981) 『高齢化社会』、文部省 (1993) 『我が国の文教施策』、川田侃・尾藤正英・田邊裕ほか 3 3 名 (1993) 『新しい社会 地理 2 編』の三篇を選んだ。三編共にいわゆる書きことばで書かれている。以下、本稿においては、これら三編のデータをあわせて以下 BOOKDATA と呼び、出典が吉田寿三郎 (1981) 『高齢化社

会』である例文を（吉田 1981）、残りの二つの文献についても同様に 文部省（1993）『我が国の文教施策』を（文部省 1993）、川田侃・尾藤正英・田邊裕ほか 3 3 名（1993）『新しい社会 地理 2 章』を（川田・尾藤・田邊ほか 3 3 名 1993）と表すことにする。

二つ目は、総合研究大学院大学小松左京コーパス作成委員会により作成された「小松左京コーパス」（1,391 ファイル、ファイルサイズとしては 40.0MB）より対談、座談会形式のファイルを選んだ データ（あわせて 54 編）である。対談、座談会形式のファイルばかりを選んだので、このデータは話しことばといってもよい内容になっていると考えられる。以下、今回使用することにした 54 編の「小松左京コーパス」の対談、座談会形式のデータを指す場合にはこれを KOMATSU と呼ぶ⁵。また例文を提示する際には、どのファイル（テキスト）から引用したのかファイル名をそのつど示すこととする。

3. 2 データの絞り込み方

以上の二つのデータから、今回は上で掲げた考察の対象の範囲に則って「のが」「のを」「のは」「ことが」「ことを」「ことは」でマッチする用例を、EmEditor を用い、検索する⁶。更に、今回は EmEditor による検索だけでは、今回考察の対象としない用例も含んでしまうので、検索をかけた後に一文ずつチェックし、今回の考察の対象になると考えられる用例を絞り込むことにした。

仮説によれば、gap があると認められる場合、「内容を指す「こと」」が用いられている場合、語彙的に決まった表現であると考えられる場合などの限られた用例以外は、「の」「こと」は両方用いられることになる。そこで、データを集計するにあたって、gap があると認められる場合、「内容を指す「こと」」が用いられている場合を表では「除外される要素」として扱い、また語彙的に用いられている表現から「の」あるいは「こと」が選択されると考えられる場合を表においては「語彙的要因」として扱い、それぞれの用例数を示すと共に、全体からそれらの要素を引いた用例数を示した（表は別紙参照）。また、今回は BOOKDATA、KOMATSU 共に「ことが」「ことを」「のが」「のを」「ことは」「のは」が用いられている用例について扱うことにする。以下、それぞれ集められた用例から差し引かれる用例がどのようなものであるのか例文を一部あげる。

（2 1） 今回の景気調整過程は大きく 3 つの局面に分けて考えることができる。（文部省 1993）

（2 2） 3 阪神工業地帯、中京工業地帯、京浜工業地帯について、工業生産額とそのうち

⁵さらに、BOOKDATA、KOMATSU のそれぞれのデータがどのようなものであったかについては、付録〈I〉（BOOKDATA、KOMATSU のデータそれぞれ 1 ページ分を載せた）を参照。
⁶補文標識「の」「こと」に他の助詞が後続することについては、「から」「まで」など明らかに「の」に後続することが「こと」に比べ、少ないと考えられる場合や、文または文を名詞化するという機能を担っているのか否か判断に迷うような場合があるが、今回は検索の対象としていない。また、助詞が「の」「こと」に後続していない場合・コピュラ「だ」などが後続する場合についても検索の対象としていない。これらの考察の対象外としたものは、橋本(1994)による「「の」補文の出現を妨げる主な統語的制約」においても扱われている。

- わけを比較し、分かったことをまとめてみよう。(川田・尾藤・田邊ほか 33名 1993)
- (23) そのため、より暖かいよりよい生活を求めて南のヨーロッパその他まで進出していったのがバイキングである。(吉田 1981)
- (24) 松本：ええ。それでぼくは小使の給与の問題で弁護して案を通過せしめたことがあった。(KS1025)
- (25) 小松：生きがいを感じて死ぬなんて聞いたことがない(笑)。(KS0831)
- (26) そのためにキリスト教徒は全然ふえずに、最後の一人が死んで、あとにとにかくノアみたいな、ノソノソしたのがはびこるといふ話を書こうとしたんですけども、法の理念というのは、極端化していくとそういうことがあると思うんです。(KS1122)

全体から(21)～(26)のような例を除き、以下の(27)(28)のような用例を集める。

- (27) 唐津：そうそう。[中略] このあいだ、シカゴでおもしろい経験をしたのは、ご存じかもしれないけれど、松下がシカゴでモトローラ社から工場を買った。(KS0927)
- (28) 谷の出口の水分あたりから、等高線がほぼ同じ間隔で扇の形に広がっていることがわかる。(川田・尾藤・田邊ほか 33名 1993)

データ集計の結果に関して今回、「のは」「ことは」の場合(BOOKDATA・KOMATSU 共に)に限って

- (29) それにひきかえ、佐々木道誉に一種の悪の匂いがするのは、彼は都を所払いになるとちゃんと、その法律に従うんです。(山崎 KS0494)
- のような例が何例か見受けられたため、それらの例を「主文が文として成立していないと考えられる」例として扱った。

3. 3 データ集計の結果から分かること

「ことは」を除いて、BOOKDATA では「こと」「ことが」「ことを」が 460 例、表にある「除外される各要素を差し引くと 320 例あった。KOMATSU では、「こと」(BOOKDATA と同様に「ことが」「ことを」) 348 例、表にある「除外される各要素」を差し引くと 277 例あった。「ことは」を含めると、BOOKDATA で「こと」が 647 例あり、「除外される各要素」を引くと 455 例、KOMATSU では、541 例で、「除外される各要素」を引くと 414 例である。

一方、「の」「のが」「のを」については、「のは」を除いて、BOOKDATA で 40 例あり、「除外される各要素」を除くと 20 例になる。KOMATSU では、326 例あり、「除外される各要素」を引くと 192 例になる。また、「のは」を含めると、BOOKDATA で 228 例あり、「除外される各要素」を引くと、91 例になる。KOMATSU では、1042 例あり、「除外される各要素」を除くと、399 例になる。これらの結果から、「書きことば」が用いられていると思われる BOOKDATA の方が「話しことば」が用いられていると思われる KOMATSU よりも「こと」に対する「の」の用例数が少ないことがわかる。

4. 考察・今後の課題

4. 1 考察

以上の結果、全体から gap があると考えられる例、「できる」「見る」など語彙的に決まった表現を除いた用例についてみると、頻度は別問題として、それぞれ「の」「こと」を入れ替えても許容されるように思われる。

- (30) 91年度に負債金額が急増したのは、バブル期に不動産、株式などの資産へ多額の投資、投機を行っていた企業がバブルの崩壊により倒産したことが原因である。(文部省 1993)
- (31) 残された孫たちを育てることが、この老婦人の生きがいになったのはいうまでもない。(吉田 1981)
- (32) 日本には地形や気候の特色から、さまざまな災害があることを理解するとともに、地球規模の環境破壊にも目を向けよう。(川田・尾藤・田邊ほか 33名 1993)
- (33) 実際に老年問題というのは福祉と保健だけでなく労働も対等に組み合わせて、ワン・ドア・システムにするのが望ましいとは年来の私の主張であって、その大前提として教育が大切であることはいうまでもないところである。(吉田 1981)
- (34) しかも、輸入抑制要因を取り除くことは、それ自体として黒字を縮小させる要因にもなる。(文部省 1993)
- (35) 文化財保護法や古都保存法が定められてはいるが、開発と歴史的風土の保存を両立させるのは難しく、地域の課題になっている。(川田・尾藤・田邊ほか 33名 1993)
- (36) さいごに『莊子』を例にお引きになって、世の中をあまり機械化してしまうと人間性が貧しくなってしまうのでそれを制御することが必要だろうという問題を提起されたと存じます。(KS0573)
- (37) なぜかという、もう一つ、深くは知らんけれども、中国文明というものがあることを知っていた。(KS0707)
- (38) つまり、ストーリー主義でちゃんとわかるように作ってしまうのが、いやだったんじゃないか、という気がする。(KS0526)
- (39) 昔、ご真影を見たら、眼がつぶれるって言われて子どもごろにおっかなくて、かたく眼をつぶってたのを思い出すな(笑)(KS1088)
- (40) [前略]通貨の問題について考えることは、その答えにつながるヒントを与えるかもしれないと思います。(KS0573)
- (41) 「恋に上下のへだてなし」と言うけど、そういう婚姻ルールをやぶって「駆け落ち」なんかするのは、あくまでその社会では「異常」なことでしょう。(KS1088)

以上あげた例の中には、場合によっては(34)(36)(40)のように「こと」を「の」に交替させる事が許容されないと考えられることが予想される例もある。しかし、これらの判断は文体の影響を受けているとも考えられる。結果から分かるように、補文標識「の」「こと」は用例数において文体差の影響をうけている。このことは、それぞれのテキスト(KOMATSU・BOOKDATA)で用いられている文において、より書き言葉的な表現が使用される場合には「こと」が好まれる表現が用いられているということを示唆している。(34)(36)(40)は、いずれも書きことば的な表現が用いられている例である。従って、このような例においては「こと」が用いられることが自然で、それを「の」に交替させることが難しいと感じられることが考えられる。

その中でも、語彙的要因から「の」「こと」のどちらかが選択される例としてあげられた「(～することが)できる」「(～するのを)見る」などには当てはまらないが、慣用的な表現により、補文標識「の」「こと」のどちらが用いられるかが決まっていると思われる例もある。これらの例についても意味的に似ている表現と置き換えたり、若干形を変えただけで許容度に違いが出てくるように思われることなどから、表現として固定されていると考えられる限り、「できる」「見る」などと同様、「語彙的な要因」から「の」「こと」が専ら用いられている例として扱ってよいと思われる。以下、慣用的表現から「の」「こと」のいずれかが用いられることが決まっていると考えられる例である。

(41)⁷ 用途別にみると、商業地では、オフィスの供給過剰等を背景に東京都区部中心部で著しく下落しているのをはじめ、〔後略〕。(文部省 1993)

(42) 〔前略〕個を中心に考えて自分の一代以上のことは考えてもみようとしない方々にとっては無用の記述と強く感じられることであろうことは十分承知している。(吉田 1981)

「～であろうこと」という表現が固定しており、他に「～かもしれない こと/の」や「～である の/こと」、などが許容されることから「～であろうこと」という表現が固定されていると考えられる。

(43) 安もののフロイディアンを思想界に輩出させたことをもってしても、ここ入れる必要がある。(KS1109)

(44) 今度のオフィスができたのを機会に、秘書を集めてブレインストーミングさせた。(KS0927)

(45) むろん気力の衰えもあるが、関節が固まるといったことによって、それまで元気だったものが、ちょっとした病気で寝込んだのがもとで、身動きのできないねたきり

⁷ 「～のをはじめ」は、「こと」でも用いられる可能性がある。「・・・著しく下落していることをはじめ、」でも許容されるため、ここでは慣用的表現であるため「の」が選択されている例として挙げたが、「の」「こと」の交替が可能な例としてあげてもよいかもしれない。

状態に陥ってしまいやすい。(吉田 1981)

(46) あがることはあがるけれども。(KS0526)

「～ことをもってしても」「～のを機会に」「～のがもとで」などの表現は、それぞれ

(47) ^*安もののフロイディアンを思想界に輩出させたことをもってした。

(48) ^*今度のオフィスができたのを機会だ(「～を機会にして」という表現では「こと」も用いられ、「今度のオフィスができた の/こと を機会にした」という(48)よりも許容度の高い文ができる)。

(49) ^*ちょっとした病気で寝込んだのがもとだ。

のように言い換えることができない。これらの表現も決まった形であられる慣用的な表現であると考えられる。次に(46)のような表現については「AすることはAする」という形で用いられており、他にも

(50) 学校に行くことは行く。しかし、授業には出ない。

のような例がある。この場合、主文の述語と補文の述語が必ず同じ述語であり、「ことは」が用いられるのであって「ことが」が用いられることがなく、また「行かないことは行かない」のように否定文にはできない。それらのことから、「AすることはAする」のような表現は、慣用的な表現であると考えられる。

(51) 時短の推進は国民生活にゆとりをもたらし、国民が豊かさを実感するうえで最も重要な課題となっていることは既にみた。(文部省 1993)

また(51)のような例においては、文体の影響が考えられる。実際、KOMATSUにおいては、そのような例はみつからなかった。

結果として、上にあげた慣用的な表現、そしてデータ集計の際に挙げた「除外される各要素」、gapがあるとみられる例を除くと、「の」「こと」はどちらが用いられやすいかを別にして、どちらも用いられうることがわかる。

4. 2 今後の課題

今後の課題としては、まず、本稿のように「の」「こと」のいずれかが必ず選択される場合について、共時的にみて語彙的な要因などにその原因を求める立場をとった場合、通時的に「の」「こと」が必ず選択されるのは、どのような理由からなのかを考察する必要がある点が挙げられる。今回、共時的にみて固定された表現としてみたものが、逆に通時的にみた際になぜ「の」あるいは「こと」を用いる表現として固定されていったのかを考えることは、本稿で述べた内容を裏付けられると思われる。また、使用するデータの量的質的な問題、さらに用例の解釈の許容度に関しても配慮する必要があると思われる。今後は、上記のような問題点を解決しながら、考察の対象を広げ、また異なった観点からこの問題に取り組んでゆきたい。

5. まとめ

結論として、共時的に、また文もしくはそれに相当するものを名詞化するという意味で、

補文標識「の」「こと」は、語彙的に決まっている表現などを除くとどちらかが許容されないという例はないと考えられる。仮に gap があると考えられる例や、文体差に影響をうける表現、さらにその語彙的に決まっている表現が「の」「こと」の本来の意味や特徴を表しているものだとしても、その特徴を主文・補文の解釈に頼らず、また「の」「こと」が文を名詞化する際に用いられるようになった歴史的な経緯などにふれずに説明することは難しいように思われる。また、本研究においても他の先行研究と同じく、「の」「こと」のどちらが選択されるのか、その両方が選択されるのかの許容度や、頻度は基本的には主文の述語によると思われるが、どちらが多く用いられるのかといった頻度もまた文体差などの「の」「こと」そのものの意味や特徴以外の要素が関わっていることが予想される。やはり、まだ残された問題もあるが、文を名詞化するという働きがあるという点からみれば、「の」「こと」は、共時的にそのどちらも用いられると考えられる。

先行研究では、あくまで「の」「こと」のどちらかが選択される例から「の」「こと」がどのような性質をもつものであるのか、という点について論じているが、本稿ではこのような「の」「こと」についてそのどちらかが専ら選択されるのは、共時的にみると語彙的に決まっている表現など、むしろ限定された場合であるとみなした点が異なる。

参考文献

- 井上和子(1976)『変形文法と日本語上』大修館
- 影山太郎(1977)「いわゆる日本語の「名詞句補文辞」について」『英語教育』25-11 pp.66-70
- 工藤真由美(1985)「ノ・コトの使い分けと動詞の種類」『国文学解釈と鑑賞』50 卷三号 pp.45-53
- 久野 暉(1973)『日本文法研究』大修館
- 黒田成幸・中村捷(1999)『ことばの核と周縁—日本語と英語の間』くろしお出版 pp.27-103
- 近藤泰弘(1997)「「の」「こと」による名詞節の性質」『国語学』190 号 pp.132-142
- 佐治圭三(1969)「『こと』と『の』—形式名詞と準体助詞その(1)—」『日本語日本文化 1 号』大阪外国語大学 (1991 年『日本語の文法の研究』ひつじ書房 pp.181-261 に収録)
- _____ (1993)「「の」の本質—「こと」「もの」との対比から—」『日本語学』12-11 明治書院 pp.4-14
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』くろしお出版
- 坪本篤朗(1982)「名詞性と島の制約—補文化辞の意味と統語的性質—」『英文学研究』59 巻 日本英文学会 pp.245-263
- _____ (1984)「文の中に文を埋めるときコトはノとどこが違うのか」『国文学解釈と観賞』29-6 学燈社 pp.87-92

仁田義雄・益岡隆志・田窪行則(1997)『新日本語文法選書 2 複文』くろしお出版
pp.11-23

橋本 修(1990)「補文標識の『の』『こと』の分布に関わる意味規則」『国語学』163号
pp.1-12

_____ (1994)「『の』補文の統語的・意味的性質」『文藝言語研究・言語編』25 筑波
大学 pp.153-166

宮島達郎・仁田義雄編(1995)『日本語類義表現の文法(下)複文・連文編』くろしお出
版 pp.417-428

レー・バン・クー(1988)『「の」による文埋め込みの構造と表現の機能』くろしお出版
Josephs, Lewis. (1976) "Complementation." M. Shibatani ed. *Syntax and Semantics*,
vol.5, Academic press, New York, pp.307-370.

Nakau, Minoru (1973) *Sentential Complementation in Japanese*, Kaitakusha,
Tokyo.